

## 外国人の人権尊重に関する実践事例

### 1. 基本情報

#### ○都道府県名及び市町村名

宮崎県 都農町

#### ○学校名

宮崎県立都農高等学校

#### ○学校のURL

<http://cms.miyazaki-c.ed.jp/6026>

### 2. 学校紹介

#### ○学級数

【総合学科】全学年各3学級 【合計】9学級

#### ○児童生徒数

【全児童生徒数】174人（平成28年5月1日現在）  
（内訳：1学年67人、2学年48人、3学年59人）

#### ○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

特記事項なし

#### ○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

##### 【学校の教育目標】

「地域社会の発展に貢献できる有為な人材の育成」

##### 【人権教育に関する目標】

（基本目標）

- ・学校の全教育活動を通して、自他の尊厳を大切にしながら、望ましい人間関係の醸成を図り、社会連帯の意識を一層深める。
- ・被差別部落の歴史と同和問題を深く認識し、身の回りに残る差別や偏見を正しく見抜き、解決していこうとする態度を育てる。
- ・すべての人々が相互に基本的人権を尊重し、一人一人がかけがえのない存在であることを認識させる。また、その意識を実生活の場において正しく実践する人権感覚を育てる。

（重点目標）

- ・人間尊重の教育、進路保障に日常的に取り組む。
- ・同和問題を正しく認識し、基本的人権の尊重を基調とする学習を積極的に実施する。
- ・人権教育、同和教育を「こころの教育」として取り組み、差別をしない、差別を許さない態度を育てる。

#### ○人権教育に係る取組一口メモ

日常的に望ましい人間関係の醸成を図り、人権教育、同和教育をこころの教育と関連付けて指導し、差別をしない、差別を許さない態度を育てる。

## ○人権教育にかかる取組の全体概要

教科指導やLHR等を中心に、教育活動全体を通じて人権教育や道徳教育、情報モラル教育等を実施する。人権学習に係るLHRについては、各学年別に年間2回、全学年を対象に年間1回の計3回実施し、また必要に応じて企画する。

(各教科活動及びホームルーム活動)

生徒同士が共に学習する姿勢を持ち、規範意識や帰属意識を高めることで基本的人権を尊重する学習環境を醸成し、自己有用感を育む授業づくりを目指す。また、学習内容における基礎的・基本的事項を徹底することを通して、科学的・合理的な視点や考え方を養い、専門科目においては正しい職業観や、勤労観の育成を目指す。

(その他の活動)

学校行事やPTA活動、体験学習等を通じて、地域社会との連携を深め、生徒が様々な人との関わりを経験し、多様な価値観に触れることによって人権教育・同和教育の実践強化を図り、豊かな心を育むことを目指す。

## 3. 実践事例の内容

(取組のねらい、目的)

近年、生徒たちの言葉に関わる環境はインターネットやSNSによって急速に変化している。また、友人間で交わされる言葉も非常に激しいものや、相手に配慮が十分でない言葉が聞かれる。このような生徒の言語環境をより良くするために他者を理解し、多様な価値観を認め合い、自分の気持ちをうまく伝えられるように、以下の活動に取り組むこととした。それぞれの活動のねらいは以下の通りである。

### ○「一人一人を大切に作る人権」

「自分も相手も大切に作る関係づくり」について、ワークショップ型の人権学習に取り組む。身近な「異性との交際に関する場面」という「性教育」の要素も取り入れた具体例を使い、自分も相手も大切にするためには、どのような言動をとると良いかを具体的に考える。

### ○「ちがいを知る」

アイスブレイクでは「だまし絵」に対する認識の違いから、同じものを見ていても人によって捉え方が違うことに気付いてもらう。また、ワークショップを通して、互いの価値観の違いを感じながら、多数決ではなく、話し合いによって納得できる問題解決の糸口を見つけることを体験する。さらに、アニメキャラクターという身近な題材を用いて国家間における「価値観の違い」に目を向けさせ、個人間から国家間まで、様々な価値観の相違が存在し、その違いをどのように乗り越えていくべきかについて具体的に考える。

### ○「障がい者差別防止」

障がいのある人やその家族の人たちの立場に立って考えるように、車椅子を体験したり、アイマスクを使って視覚障がい者の疑似体験をしたりすることで、支えたり支えられたりする関係について体験的に理解し、誰もが住み良い社会の実現に向けて積極的に取り組む態度を育てる。

## ○「アンガーマネジメント」

「気持ちを見つめて～怒りと上手につきあおう～」というテーマを設定し、怒りが外に向くと、暴言や「いじめ」などのトラブルにつながるため、まず社会生活の中で「怒り」をコントロールすることが大切であることを確認してもらう。その上で「怒り」のメカニズムを理解し、対処することの必要性に気付かせて、具体的にどのように行動するのが良いか、その方法を体験的に学ぶ。

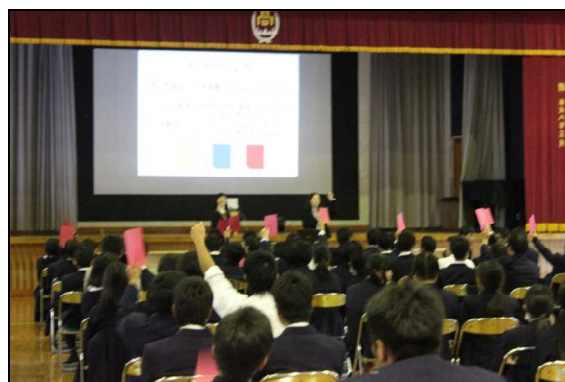
### (取組を始めたきっかけ)

本校の生徒の中には、人間関係を築くことに苦手意識を持っていたり、感情や意見を思うように伝えられなかったりする生徒がみられる。また、家庭環境に恵まれず困難な状況の中で育ち、自分を大切にできない生徒もいる。よって、生徒が自尊感情を育み、他者と良好な関係を築くために、対話や体験の積み重ねが欠かせないと考えた。そこでワークショップ型の人権教育を多く取り入れることによってソーシャルスキル向上につながり、他者理解を深めながら感情を適切に言語化して自己表現できるようになることを期待した。また、生徒を支える保護者自身が大変若く、様々な面で家庭環境が不安定な生徒が多いという実情からも、「性教育」や「キャリア教育」の視点も含めた総合的な人権教育が必要であると考えて取り組んだ。

### (取組内容)

## ○「一人一人を大切にする人権」

宮崎県の男女共同参画センター派遣事業を利用し、特定非営利法人ドロップインセンター理事長黒田奈々氏と、男女共同参画センターの外山有美氏を講師に迎え、「性教育」を切り口にロールプレイングなどのグループワークや、話し合い活動と講演を組み合わせたワークショップ型講演会を全校生徒対象に開催した。



## ○「ちがいを知る」

まだ新しい人間関係が始まったばかりの1年生を対象に7月に実施。個人間だけでなく、国家間においても「価値観の違い」が生じることの必然性を認識させ、自分と相手の価値観が違ったときに、問題解決を図るためにはどのような態度が必要かを体験し、考えさせた。「だまし絵」や人間関係のシミュレーションなど、生徒が取り組みやすい題材を用いてゲーム感覚で4～5人のグループ活動を行い、生徒が陥りやすい人間関係のトラブルを解決する視点を身に付けさせた。

○「障がい者差別防止」

1年生対象に、障がい者も社会の一員であり、健常者も加齢や病気・怪我などで障がいをもつ可能性があることや、支えたり支えられたりする経験を通して、相手を理解し、自分のこととして考え行動することの大切さを学ぶために、実際に車椅子やアイマスクを用いて体験学習を行った。

○「アンガーマネージメント」

2年生対象に、各クラスで3人1組のグループを作りワークショップを行った。

「怒り」の感情で生じる身体感覚や精神面での変化など、「怒り」のメカニズムを知り、初期段階での対処が大切であることを気付かせ、その対処法を学ぶために「滋賀県総合教育センター発行 アンガーマネージメントプログラムスタートブック」を参考にしたプログラムを実施した。ワークシートを使って知識・理解を獲得し、実際に「怒り」を感じたときにどうすればうまく対処できるかを体験させた。

(取組の主体や実施体制)

人権教育推進委員会(※)が企画・立案し、実施する対象学年の職員が話し合い、実施した。

※人権教育推進委員会

教頭・生徒指導主事・人権教育担当者(情操教育部主任)・特別支援コーディネーター・教育相談係・養護教諭・各学年担当(正担任1名・副担任1名)・関係職員にて構成している。

(取組の頻度)

ホームルーム活動における人権教育については、年間3回の実施を基本としている。各学年別に2回、全校生徒対象を1回実施し、必要に応じて更に企画する場合もある。

(取組を実現するに当たって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫)

【 課題1 】

生徒が、差別をすることや偏見を持つことなく公正・公平な態度で接し、正義の実現に努めるためには、まず自分の中に偏見や思い込みが生じることを認識し、そこに向き合うことが大切であるという気付きが必要であること。

【 工夫1 】

生徒が興味関心を高め、かつ意見の分かれる題材を取り上げたり、生徒の感情に訴える手立てとしてロールプレイングやワークショップ型の手法を取り入れたりした。

【 課題2 】

生徒の課題として、自己の考えや感情にとらわれやすく、自分が共感できない感情や価値観に対して理解が進まない傾向があること。

【 工夫2 】

生徒自身が共感できる素材をテーマに設定した。講義型より、生徒が主体的に活動するワークショップ型を中心に学習方法を設定した。

### 【 課題 3 】

人権教育推進委員会において作成した指導案に対して、授業者が忌憚なく意見を出し合って、生徒の現状や指導者それぞれの事情に対応できるか。

### 【 工夫 3 】

人権教育推進委員が学年会にて説明し、学年会であげられた改善点を人権教育推進委員会にフィードバックするようにした。様々な立場の生徒がいることを念頭に、その都度、配慮事項を個別に洗い出して対応した。

## 4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

「一人一人を大切にすること」

### 【 課題 】

生徒に身近な「異性との交際場面」という「性教育」に関わる内容も含めた題材を取り上げたため、内容の表現によっては生徒に「異性との交際」に対する誤解が生じる危険性があった。また、若年妊娠(あるいは中絶)の経験者や性的マイノリティの生徒がいる可能性から、多角的な視点が必要であった。

### 【解決方法】

プログラムを構成する前に、講師と直接打合せを行い、本校の事情と授業の目的を共有した。その後、メールや電話にて指導案について詳細に協議し、校内の組織においても検討することで問題点を修正するとともに、共通理解を図ることができた。また、若年妊娠・中絶の経験者や性的マイノリティの生徒がいることを前提として内容を決定し、事前に生徒に対し概要を提示して相談を呼びかけた。

「ちがいを知る」

### 【 課題 】

一人一人価値観が違うことや、同じ内容に対しても、国と国、自分と他者において価値観の違いが生じるということを生徒自身に実感させる工夫が必要であった。

### 【解決方法】

ゲーム感覚でできる「だまし絵」を使ったり、生徒の興味を引きながらも意見の分かれる例題を使ったりすることで、生徒たち自身の言葉で話し合わせることもできた。

「障がい者差別防止」

### 【 課題 】

他者を理解し受け入れることを実感させる必要がある。また、実際にアイマスクや車椅子等を使用して、障がい者と同じ体験をする際に、けがをするなどの危険性が生じる可能性がある。

### 【解決方法】

グループ作りから、無理なくペアが作れるように支援を行った。アイマスクの利用や車椅子体験では、危険が予想される箇所には職員が付き、声かけを行って、万一の事態に備えた。

「アンガーマネージメント」

【 課題 】

なじみのない「アンガーマネージメント」という概念を理解させることができるか。

【解決方法】

よくある場面設定から自分の感情を言語化させたり、イラストを使って感情を表現させたりすることで、「怒り」を構成する感情を自覚させ、板書用シートを利用して身体感覚や思考の変化と結びつけることを強調した。

## 5. 実践事例の実績、実施による効果

(取組の実績)

生徒が積極的にグループワークや話し合いをすることが多くなってきている。  
感想文の質・量が向上してきている。(以下、生徒のアンケートより)

「一人一人を大切にすること」

- ・人は、本当にいろんな人が支えあって生きているので、一人一人を大事にしていきたいと感じた。将来はパートナーを大切に、より良い幸せな家庭を築きたい。
- ・「一人一人を大切にすること」について、自分の気持ちばかりを押し付けず、相手の気持ちも考えることが必要と思った。
- ・人はそれぞれ考え方が異なる。自分の意見は、他人に流されず、相手にしっかり伝えることが自分を守ることだと思う。
- ・話し合いのとき、一人一人が違う考えを持っており、話のとらえ方一つでもたくさんの考え方が異なることを改めて知ることができた。

「ちがいを知る」

- ・人はそれぞれ価値観が違うことがわかった。だから、話したりするときには自分の意見と相手の意見が違っても、よく理解したいと思った。
- ・みんなが同じ考えじゃないから、人ってすばらしいと思った。違うからこそ学ぶことがあったり、考えさせられることがあったり、納得することがあると思う。「価値観のズレ」でけんかをしてしまうことが多いのがカップルだ。そのようなことがあるからこそ改めて幸せを感じると思う。100人いても何人いても意見が違うから楽しいと思える。
- ・国や人によっての価値観の違いがあることがすごく分かった。

(取組が効果を上げた実際の事例)

生徒が、それまで隠していたいじめや人間関係の悩みに対して職員に相談することが増えるなど、「自分の思い」を表現できるようになった。

(取組の実施から得られた知見・経験により改善を図った事項)

NPOなど外部の諸機関との連携を図るようになった。

他府県の実践例などを積極的に研究し、取り入れるようになった。

## 6. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及びそう評価する理由)

生徒・職員の感想文・アンケートから、「取り組んで良かった。」という評価が多かった。また、取組中の生徒の活動の様子も活発になってきている。

特に「ちがいを知る」という活動後の感想から、多くの生徒が多様性や価値観の違いを認め、個性を尊重することの大切さを実感していることがわかった。多様性を認め、他者理解を深めることは、互いの人権を尊重し合う社会の形成者の一員としてもつべき、大変重要な価値観であると考え。このような教育活動はいわゆるヘイトスピーチの解消に向けた取組の一つであり、継続的・計画的に学習していくことで、生徒自身の人権とともに、他者の人権を守るような意識を高めることができ、ひいては実践行動に連なると考えた。

(保護者や地域住民からの反応)

ある高齢者から、本校生徒が近隣の駅において、切符の購入やホームの案内などについて、大変丁寧に援助をしてくれたとのお礼の手紙が送られてきた。また、地域の住民からは挨拶が良くなったとの声も聞かれるようになっている。公共施設や電車内等の学校外における行動については、これまでも課題として取り組んできたところであるが、今後ともこのような報告が多数聞かれるように、地域住民との関係についても生徒が高い人権意識をもって行動するように意識付けを行っていきたい。

(現在、実施に当たって課題と感じていること)

授業者の意識を高め、教師が自ら問題意識を持って取り組むために、教師の指導力を高める必要があると考える。そのためには、どのような校内研修が有効か、今後研究していく必要があると考える。